

私の戦争体験

戦争の世紀から平和の21世紀へ 子どもたちのために語り継ぎます

第22集

夏の班長会・班会 平和資料

へづみ

2000年8月



山村で迎えた戦争の記録

堺市 今井 主代

深い山村で育った私。小さい頃経験した戦争にまつわる思い出は多い。

二人の兄の出征。村の人全員集まって来て祝う出征。万歳、向こうの山にこだますほど大きな声で、手作りの紙の小旗を振りながら「勝つて来るぞと勇ましく！」。笑顔で父母姉弟を後にした兄の笑顔。「はえば立て、立てば歩めの親心」。昔も今もその絆は変わりはないはず、私が息子を育てて今思う。お国のためとはい、あれは本当の笑顔だったのか。間もなくして姉二人は奈良市内の女学校に進学しながら学徒動員で軍需工場に狩りだされ、勉学に精進出来なかつたとか。

ある日、父は先祖から伝わる大切な仏具を全部、銅の火鉢数個と花器、鉄瓶、赤い洗面器、蔵に保管していた槍の鉾などみんなお国のために、戦争に勝つためといつて供出した。「この戦争は絶対日本が勝つ」父母の言葉はいつもそうだった。意味もわからず囲りから習った軍歌が今でも口ずさめる。其のころ家に大きなラジオがあった。村の人は毎晩ニュースの時間になると集まって来た。突然、只今紀伊水道上空に敵機来襲というニュースが入ると、父は暗闇の中、坂道を上り畠を横切つてサイレンを鳴らしに走つた。けたたましい音が山にぶつかって響き返つて来る恐ろしさに身が締まつた。みんな急いで家に帰り、電灯に黒いカバーを掛け、雨戸を閉め、母は弟と私を抱きしめ、息をひそめ、父の帰りを待つた。夜中、東の空が真赤に染まつっていた。父は「大阪がやられたのか」と言った。私の父は長男だったので招集されなかつたと聞いたように思う。

農家だった我が家には、出征軍人を出しているため、農繁期には高学年の人が大勢手伝いに来てくれた。収穫した米や麦は俵に詰め、ほとんど供出し、家の生活もだんだん貧しくなつていった。そんな時「お腹がすいたなど卑し

慰問袋



い言葉は口にだしたらあかん」母は私たち子供にとても厳しかつた。夏は少し色づいたトマト、秋は柿の木に登つて未だ熟していない実をむさぼり空腹を癒した。そして兵隊さんの慰問袋に干芋、ハツタイ粉、干餅などを詰め、寮生活している姉たちにも送るため、母が荷づくつた物を遠く四キロも離れた山道を上り下り背負つていくのは私の役目でした。

そして終戦の日。私は何のためか隣村の病院に注射をしてもらいに行き帰つてくると、村の人々が集まつて声を出して泣いていた。父は握り拳で廊下の板を何度も叩き付け涙を流している。母は正座をしたまま頭を廊下に押し当て肩を震わせていた。驚く私に父は敗戦を教えてくれた。子供心に悔しかつた、腹が立つた、悲しかつたことは鮮明に覚えている。兄一人と姉たちのことも心配だつた。大人になつたら勉強して絶対仕返してやるとも思つた。

それから数年、不自由な生活の中にも都会の学校に進学のため宿舎に入つた。粥一杯と梅干し一個、たまに味付パン一個、加工粉乳一杯の生活になつた。「お腹がすく」など卑しい言葉は口にしなかつた。その頃、闘牛資を汽車で運ぶ人の食糧を没収した所轄の警察署に分配して頂くため上級生と荷車を押し取りに行つたこと、この原稿を書きながら苦しかつた思い出にふける。その頃、姉二人は小学校の教師をしていた。兄二人の音信はなかつた。卒業して間無し、友人と二人で広島の原爆跡を訪れた。白黒テレビの映像、新聞などからの知識でしか知らなかつた傷跡、言葉に現せない悲惨さ、悔しさが胸を締め付けた。只々涙の内に線香を手向け、冥福を祈るしかなかつた。広島に二回、長崎に三回、沖縄にも三回、その度あのひめゆりの塔を訪れ花を手向けた。敗戦国日本の悲惨な現況を深く知る度、この忌まわしい現実を後世に語り告げずに葬つてしまつてはいけないと思う。

近年、二度ハワイに旅した。あの真珠湾攻撃の「パールハーバーアリゾナメモリアル」と称して、大きな記念館がある。確かに日本兵が爆撃したアリゾナ号は海底深く眠つていた。それを見た時、説明を聞いた時はとても複雑な気持ちだつた。そのために戦死された方たちの名前を全部石に刻み込んだ横に、当時の日本機操縦士の名前と写真も展示されていた。私はただ「ごめんなさい。どうか安らかに」と冥福を祈るしかなかつた。

人類はもちろん、草木の根つこの命まで奪つた原爆の恐ろしさ、多くの人々

供出



日本軍の敗退がたび重なるようになると、国内は金属不足に苦しめ、一九四二（昭和17）年、政府は金属回収令を出して、飛行機、軍艦などの建造の資材を確保しようとしました。お寺からは鐘や仏具、学校のスチーブも強制供出が命じられた。一九四四年には子どもの玩具まで回収され、包丁、銅、釜以外の金属製品は家庭から姿を消し、代用品の竹製のナイフまで食卓に現われた。また、アルミや銅の貨幣も回収されてマッチのラベルのような紙幣に変わつた。

戦地の兵士などを慰めるために、中に娛樂物、日用品などを入れて送る袋。主に愛國婦人会などが慰問活動ひとりくんだ。袋はデパートでも売られ、中身によつてランク付けされていた。手紙代筆屋さんの仕事は慰文中心から慰問文に変わり、慰問用のオモチャも登場した。また、節分で撒いた豆も後で拾つて慰問袋へ入れて戦地へ送つた。

が犠牲になり、五十余年経った今でも被害で苦しんでいる人々のため、この現実を広く世界に再確認を呼びかけたうえ、やがて来る二〇〇一年に想うことを。憲法の改正云々もいいが、国際社会に於いて国連を通じ核兵器の禁止に率先して我が国日本がリーダーシップ的役割を積極的に果たさなければならぬ。そして後世に「昭和と戦争の記録」を書き残し、伝えるのが私たちの義務ともいえるのではないかでしょうか。地球規模の軍縮をもつともつと訴え続けなければならないと思います。

幼い日の戦争体験

貝塚市 山中 末子

私は熊本県天草で育つた者です。戦争体験といつても六歳までのことです。昭和二十年終戦に伴い、二十一年より義務教育となり、私たちが初めての一年生となりました。先輩たちのことを思えば幸せな入学生となりました。

記憶といえば、子供ながらに覚えていることは、B29が六機、九機と編隊を組み、ゴウゴウと低く飛んで来ることでした。飛んでくる毎に裏山に防空壕を掘つてありましたので、家族九人が逃げ込みました。とにかくB29が飛んできたら、道であろうと畑であろうと、身体を丸くし、石に見えるように動くなーと言い聞かされていました。

父は兵隊ではありませんでしたが、炭鉱の方に狩り出されていたように思います。伯父たちにも赤紙が来て、次々に出征していくことになり、親戚の人や近所の人にサラシの布に「千人針」といつて一つ一つに結び目を作り、それをお腹に巻いて、弾が当たらないよう、無事帰還できるように願いを込めて縫つておられました。

母の留守中は、母が家族の面倒を見なければなりません。幸いにして祖父母、私の兄姉たちが居たので、皆協力し合い頑張つてくれたのだと思います。母たちは婦人会で敵軍から守るために小学校の校庭に集まり、竹槍を持ち、

白いエプロン、白いはち巻をして、「エイヤー」と掛け声を上げて訓練をしたり、布のバケツに水を入れ一列に並んで消火の訓練をしていました。また、食べ物もだんだん少なくなつてきましたが、幸いにして百姓をしておりましたので、野菜や木の芽、木の実などを近所の子供同士で一緒に取りに行きました。米や麦、サツマ芋もありましたが、国へと供出しなければならず、無いのに等しい位でした。

我が家は父が長男のため、伯父たちが福岡で空襲にあい、次から次へと三家族が引きあがてきて、それからがそれぞれの家族の食糧難の始まりだったことを覚えており、米ヌカの団子汁まで食べました。勿論、砂糖など有りません。有つても配給で「サッカリン」と言う物でした。そんな中、母が小麦粉をホットケーキのように焼いて食べさせてくれたことが嬉しく、思い出に残つております。

今は、衣食住、何でも不自由のない世の中なのに、なんでこんな悪世になつて行くのでしょうか。学生の皆さん、せつかく教育の場をあたえているのになぜ勉強しないのでしょうか。ある一部の人にすぎませんが、自分がほしいと思えば人の命まで奪つてしまふ、昔の戦争以上に恐ろしい世の中になつてきているように本当に思います。もっと自分を見つめ直してほしいと思います。

世界のあちこちで戦争に巻き込まれている人たちのことにもつと関心を持つて、自分自身を大切に、人のためになるような人になつてほしいと願う一人であります。

敗戦直前、戦闘機隊の一員として

八尾市 小堀 義一

女性が戦地に赴く兵士の勝利と無事を願つて贈つたもの。さらし木綿に一人一針ずつ縫つて千個の縫玉を作つた。地域の愛国婦人会や女子青年団などで各家庭に回されたり、街頭で呼びかけられたりした。「虎は千里を行つて千里帰る」ということわざから縁起をかつき、寅歳の人に限つては年齢の数だけ結ぶことができるというの、寅歳の人は競つて頼まれるというようなこともあった。

千人針



軍隊への召集令状。赤い紙を使っていたので「赤紙」と呼ばれていた。日本の男子は、明治以来、兵役の義務をもち、二十歳で「徴兵適齢」となり「徴兵検査」を受けなければならなかつた。身長百五十センチ以上で身体強健な者は、甲種または乙種合檢となり、「兵役に適する者」と認められた。そしてあとは、日常生活を送りながら、赤紙が来るのを待つた。ちなみに、工場などへの「徴用」の令状は白い紙に印刷されていた。



赤紙

今回、初めて『私の戦争体験』第21集を拝読させていただきました。非戦闘員である同胞が広島、長崎で原爆による死傷、いまだに苦しんでおられる

ことは、新聞、ラジオ、テレビにて承知致しておりましたが、その他、色々のことでの日本国民全部が大変なご苦労をされたことだと思います。

私も旧制の中学工業科を卒業後、國を守り家族を守るために、陸軍の特別幹部候補生というものに志願し、学科、身体、適性検査を受け、爆撃機の搭乗員として教育され、昭和二十年三月に卒業しました。しかし私等の乗る飛行機はすぐではなく、戦闘機隊である飛行一〇三戦隊に配属されました。日頃より実弟のように可愛がっていたいた上官の推薦にて、一日でも命がながられるようにと本部付きにしていただき、本年七四歳まで生きております。私等の戦隊は、風雲急を告げて、沖縄戦の特攻隊の目的地までの誘導および戦果確認の任務です。しかし、敵の機数、対空砲火、レーダー網、暗号文の解読が優秀で、目的地到着前より上空にて我等の数倍もの航空機が待ち構えており、旧式の航空機に五百キロ爆弾を搭載しての特攻機にてはどうてい勝ち目はありません。護衛役の我が戦隊も蝶のように群らがり襲い来る敵機に、毎日のように出撃していく戦友たちも日を追うごとに戦死者が増えていきます。昭和二十年五月末頃には、戦隊長、飛行隊長、私等本部付きの者など数名のみになり、これではどうてい戦えず東京へ。数機の航空機、一〇一戦隊、一〇二戦隊、一〇三戦隊の生き残りのパイロットを我が戦隊長が指揮をとり、土佐湾沖に敵の機動部隊現るの情報に淡路島・由良飛行場へ。昭和二十年八月十四日全機爆装、八月十五日夜明けの出撃とのことでしたが中止命令が入り待機。私の任務が本部付きでなければ、全機戦死か生き残つても数名と思うと私も同乗し一矢報わんものをと断腸の思いでした。

各々同胞も御苦労されたことです、皆様方も、どうして太平洋戦争になつたか、非戦闘員への機銃掃射、大量殺人の原爆投下、これらは勝てば官軍で、誰もアメリカを責める者はありません。真珠湾攻撃も各国が非難していますが、最近になり、アメリカも宣戦布告前に日本爆撃の計画があつたことが明らかになっています。また、なぜ戦争をしなければならなかつたか、何事もなく戦争を仕掛ける国はありません。そのようなことを知つておられる人々は何人おられますか。

空襲・空襲のあげくに

堺市 大崎 綾子

国民学校三年生の早春まで京都に住んでおりました。

三月の大坂大空襲で、夜の明けきらぬ、どんよりとした空模様です。次は京都がやられると、学校では集団疎開か縁故疎開かの道を選ばなければならず、父の仕事もできなくなり、また、私も身体が弱く、父のふるさと滋賀県に行くことになりました。今と違ひ家財道具を運ぶトラックもなく、リヤカー一二台で、おじさん、父、兄とで未明に出発して着いたのが夜中だったと思ひます。途中、私どもと同じようにリヤカー、大八車に家具を積んだ人々が続ります。空襲警報に追われながら長い道のりでした。しばらくおじさんの家で世話になり、やつと家族が落ち着ける家というか小屋です。喜びもつかの間、場所が八日市飛行場の前です。くる日も、くる日も飛行場めがけた空襲です。丘隊さんや私たちも逃げる場所を、ほんと探しあぐねました。

やつと終戦になり、ホツとしたのもつかの間、田舎に疎開した者には食べるものがなく、成長期、ほとんど代用食ばかりでした。やつと人並みの食事ができるようになったのは、昭和三十年頃でしたか。

そして私はクビになつた

藤井寺市 中尾 歩

一九四四（昭和19）年、政府は米軍の空襲に備えて「学童疎開方針」を決定、国民学校（今の小学校）の三・六年を都市から地方に分散させることにした。疎開先で子どもたちは、さびしさ、いじめ、そして飢えに苦しむ。食事は一汁一菜。麦の雑炊などはまだいい方で、フスマ（麦かす）入り小麦粉の団子、海草のまじったおかゆなど、どちらがご飯かお汁かわからなかつた。



疎
開

一般に「特攻隊」といわれ、飛行基地ごとに敷島隊、振武隊などと名で組織された。飛行機と敵の艦船に突入する。目標まで片道500mの燃料しか搭載されず、はじめから死が求められる作戦だった。また、海では「回転」など、魚雷や爆薬と一緒に船で体当たりする「特攻」も組織された。



特別攻撃隊

昭和十八年、大阪市は縁故疎開を奨励した。縁故先のない児童には試しに集団移住を実施した。行き先は南海線沿いの取石で、私は小学一年生を連れで行つた。大きい邸宅に一泊したが、おねしょをする子、泣く子などで大変

だつた。

翌十九年九月、集団疎開が始まり、一・二年生は残留、三年以上が参加した。当時二年生担任の私は三年生の寮母として香川県仲多度郡へ疎開した。寮長は副校长、学校側は主に子供の世話を。その他に現地の寮母と作業員。寮母は炊事洗濯など、作業員は、運搬、力仕事などである。このような寮が各学年一つ計四つ、お寺に分宿した。当初は助け合つるのは当然と歓迎ムードであつたが食糧が不足してくるにつれ、苦情が多くなつた。

十二月、とつぜんS校へ転勤になつた。そこも疎開で四、五人ずつ各学年おり、五年の担任になつた。しかし空襲警報が多く、ほとんど校舎の番のようだつた。だから翌二十年三月十三日の空襲には家で遭つた。母に起こされ見た窓はピンク色で、昼のように明るく、遠くの家々は燃えていた。間もなく頭上にぶんぶんと敵機がきてぱらぱら花火のように焼夷弾が落ち、あちこちの屋根にも壁にも取り付き燃え広がる。人々は右往左往、荷物を持って逃げ惑う。私達は逃げても行くところがない。鉄筋コンクリートのアパートだったので、ここは守れるのではないかと家の周りの燃える物をできるだけ外し、火の粉を防いだ。近くでも防いだ所は残り、逃げた所はそこだけ穴藏のように燃えていた。隣の木造はとても駄目だと思つたがバケツリレーの先頭に入り、どぶ川の水を何杯汲んだらう。敵機の音が消え、二並びの家が残つた時の人々の喜びは正に驚喜乱舞だつた。しかし、目が痛くて開けられない。疲れと両方で倒れるように寝てしまつた。ふと気がついて外へ出で見るとこの辺以外は何もない。松屋町筋へ出て見ると黒い雨の中、南へ南へ人が行く。子供の手を引き、ただ黙々とシルエットのように。頭からかぶつている防空頭巾、毛布など皆汚れて本当に悲惨だつた。

今日は卒業式だと気が付き大急ぎ着替え（といつてもモンペ）、松屋町筋を北へ歩く。いつ着くかわからない。学校があるのかも分らない。でもとにかく行かなければ。都島まで行くと電車が動いていて驚いた。そこから電車で学校へ。門の両脇に真っ黒な物が六つ七つずつ並べてあつた。死体だ。見ないようにして講堂へ入る。真っ暗の中、人がうごめいている。近況をはなしているのか、お互ひひそひそ無事を確かめ、すぐ式が始まつた。児童は三十人程。皆疎開地から帰つてきたのだ。

四月、今度は五年生が一年生の面倒を見るという形で、同じお寺に集団疎開した。私はまた寮母。今度は食べ物は水のようなお粥にほんの少し野菜と米粒。子供たちはお腹がすくが、家も焼けているので慰問もこない。私たち教師も川の土手で南瓜を植え、水やり、肥料やり働いた。盗みは大変叱られた。ある朝ボールのような顔を見てギョッとした。糸のような筋が眼だと気付いた。銀杏の実を食べようとしたのだろう。糸のような目から涙が出ていた。ただ腫れの退くのを祈るばかり。広い庭の隅で何かしている。寄つてみると木の株に虱(虱)がいっぱい。それをつまんで食べている。「そんなん食べたらあかん。辛抱しなさい」としか言えず、自分の無力が悲しかつた。そんな子供たちと薪を運ばねばならない。一時間ほどかかる山から一年生の背中に負わせ、勿論自分も精一杯背負つて途中での荷崩れを直してやり、頑張ろう頑張ろうと帰る。それは煮込み、入浴、虱退治に衣服を煮るためである。子供たちがどんなに帰りたがつたことか。やつと十月、大阪へ帰つた。学校には見たこともない大勢の男の先生がいた。教師が多すぎる。人員整理。私はクビになつた。

もんぺ



「もんぺ」は、もともとは東北あたりの農村の仕事着。それが戦争が始まると日本中の女性のふだん着になつた。一方で「せいたくは敵だ!」「パーマ禁止」など、街からは急速に色彩が失われていった。生地は木綿一点張りだったが、よそいきまでもんぺとなつてくると、銘仙やお召も使われ、中には袖の振りにチラと色をのぞかせる人もあつた。

米つき棒



戦局がきびしきなるにつれ、もともと乏しかつた配給の米が、精白しない玄米のまま配給されるところもあつた。そこで登場したのが簡易精白器。ハタキの柄などを利用した細い棒で、BINの中の玄米をついていると、三合の米が二時間ほどで七分づきくらいにはなつた。しかし、この作業に慣れた頃には、家庭には玄米すら届かなくなつた。

私は和歌山県日高郡の静かな山奥に生まれ、昭和十八年、国民学校に入学した時は太平洋戦争が始まつていました。空襲で逃げまどつた体験はあります。日本は神の国だから戦争は必ず勝つと誰もが信じ、毎朝、集団登校の途中氏神様にお参りして兵隊さんの武運長久を祈りました。教室の中も戦争一色で、黒板の所には「撃ちてしやまん」とか「一億一心銃取る心」、「ほしがりません勝つまでは」などの標語が張つてありました。

小さな山里でも志願して兵隊に行く青年もいましたが、そのうち赤紙が来

るようになり、私のおじさん、友だちのお父さんも出征して行きました。おじさんが強に当たらないようにと千人針もしました。お国のために死んで帰れと軍歌を歌い、バンザイ、バンザイと日の丸の小旗を振って、村はずれの時まで何人も見送りました。そのうち村はお年寄りと婦女子ばかりになって、小学生も出征兵士の家へ畠の草取り、お茶摘みなどの農作業の勤労奉仕に行く日が多くなりました。お国のために役に立つと、小さな手を力いっぱい動かしたものでした。お母さん達は国防婦人会で銃後の守りとやらで、わらで作つた人形を敵に見立てて竹やりで突き刺す練習や、火たたきで火を消す訓練をしていました。

だんだんと戦争が激しくなり、頻繁にB29が白雲を引いて飛び、時には空中戦をやり、敵機を撃ち落としたこともあります。敵機襲来のサイレンが鳴る度にお宮の森に逃げていきましたが、サイレンが鳴る時敵機が上空を飛んでいたりして、先生がB29とかグラマンの爆音をオルガンで弾いてくれましたが、私は良く分かりませんでした。出征して戦死した人たちの遺骨もよく帰ってくるようになり、大人と一緒に生徒も峠を越えて出迎えに行きました。お友だちのお父さんや私のおじさんも亡くなりました。おじさんの遺骨箱には板切れ一枚入っていました。南方に向かう途中、輸送船が沈没したのだそうです。親類の人たちがおじさんの一番よく着ていた仕事着を骨箱に入れて埋葬しました。

和歌山市が空襲にあい、焼け出された人たちが親類を頼つて逃げのびてきました。着のみ着のまま、顔はすすぐで真黒で空襲のすさまじさがよく分かりました。食糧も日増しに乏しくなり、配給もさつまいもや豆かすなどで、麦のお粥はまだまし、糠の団子や食べられる野辺の雑草も食べました。栄養失調がもとで、ちょっとした病気で命を落とす人も出てきました。運動場にさつまいも畠を作ることになり、小学生も山から土をもつて運びました。戦争に役立つものなら鍋、釜、アルミの弁当箱、皮は役に立つと私のランドセルまで非常時だと持つて行かれました。衣料品も配給でチケット制でしたから、なかなか手に入りません。母の着物で服を作り、白っぽいと敵の標的になると黒く染めて着ていました。山里と云えども艦載機がいつ現れるか分からぬので、うかつに外にも出られません。重苦しく淋しいサイレンの音にとずれることを祈っています。

いつも脅えていました。「戦争、はよ終わったらええのに」と子供心に思つたものです。

昭和二十年八月、終戦を迎えるました。国民学校三年生でした。大人は泣いていましたが、私はとても嬉しかったことを覚えています。アメリカの検閲が入るといつて教科書を燃やしたり、墨をぬつたりして、教科書も文房具もほとんどなくなり、校庭の隅で小枝を使って漢字や算数の勉強をしました。言論の自由は保障されても、食糧難はますます激しくなり、その日その日の飢えをしのぐのに必死で、母の着物や家にある目ぼしい物は食糧になつたと、いつも母から聞かされました。

食うや食わずで過ごした小学生時代。戦争とは何と愚かなものか、体験した者でないと分かりません。二十一世紀を生きる地球上すべての子供たちに、二度と戦争の悲劇を繰り返させてはいけないと思います。民族戦争で逃げまどう難民の姿に、五十数年前の日本と重ね合わせて心を痛め、平和な日がおとずれることを祈っています。

戦争は家族を引き離す

藤井寺市 青木圭比子



配給

一九三九（昭和14）年にます主食の米が配給制になり、統一して木炭、マッチ、味噌、醤油、砂糖と広がり、四五年後には石けん、ろうそく、ちり紙まで。やがて配給でないものはなくなり、また、配給では最低生活さえ維持できなかつた。その一方で軍隊には物資が豊富に集積され、ヤミ商売がはびこり、高級軍人や官僚、ボスの「顔」が世の中に幅を利かせていました。

太平洋戦争が始まった昭和十六年十二月、私は幼稚園児でした。その年の八月に父が出征しました。出征前日、散髪屋さんで丸坊主にして貰い、遺髪になるかも知れない髪の毛をもらつて帰つて来ました。私達は父の丸坊主がおかしくて大笑いしましたが、祖父母は一人息子を、母は夫をどんな思いで戦地に送り出したのでしょうか。父は姉と私にそれぞれ手紙を書き残しておいてくれました。そこには「姉弟仲良くするようにと父の武運を祈つてほしい」と書いてありました。翌日から朝早く起きて姉妹で近くの氏神様へ武運長久を祈りに日参しました。夕方になると二歳の弟は「お父さんを迎えて行こう」と書いてありました。

ボーイング29「超空の要塞」。長距離爆撃用に開発された米軍の大型爆撃機。太平洋のサイパン島基地から片道二三五〇キロを往復できた。気密室を備えていたので高々度を飛行でき、また、高度な射撃装置で防備も堅く、日本の戦闘機を寄せつけなかつた。無差別じゅうたん爆撃でほとんどの都市を焼け野原にし、広島、長崎には原子爆弾を投下した。



B29
爆撃機

と駄々をこねます。困った私たち姉弟四人は帰つてくるはずのない父を迎えた八木駅までよく行つたものです。

戦争が激しくなり、空襲警報のサイレンがなると授業を中止して集団下校しました。ある時、近くの旧制中学の校舎に付いている菊の御紋章が低空飛行をした敵機にねらわれ、機銃掃射を受けたのです。その時のバリバリバリという耳をつんざくような大音響は、もう恐ろしくて生きた心地がしませんでした。でも奈良県は京都と共に文化財が多くあるということで爆撃はまぬがれたそうです。

大阪から集団疎開児童がやつてきました。私たちのクラスにも数人の女の子が編入してきました。皆、親元を離れてお寺での集団生活です。まだまだ親に甘えた年頃なのに、戦争に勝つまではと皆泣きたいのをがまんしているようでした。

二十年三月のある日、雨がしとしと降つてきました。ふと家の前の通りを見ると、泥だらけの顔にボロボロの服を着た人が大勢歩いているのです。一瞬、何が起きたのかわかりませんでしたが、昨夜の大坂大空襲で焼け出された人々が着のみ着のままで猛火の中を逃げて来られたのです。何というひどいことだと、私と妹は息をのんでじっと見つめていました。この人達はこれからどこへ行かれるのだろう、可哀想にこれから先どうされるのだろうと心配したのを覚えています。

二十年八月、やっと戦争は終わりました。四年生の時でした。アメリカ軍に何をされるかわからないといううわさが飛び交いましたが、もう空襲もない、夜も灯火管制のない明るい夜を過ごせるとと思うと、戦争に負けたことよりほっとした思いの方が強かつた様な気がします。その年の十月、待ちに待つた父が無事復員して私たちの元に帰つてきました。四年余りも父のいない淋しい生活をしてきましたので、家族中大喜びしました。でも友達の中にはお父さんが戦死された方もおりました。

戦争は家族を引き離し、罪もない尊い命を奪い、平和をこわしてしまいます。二十一世紀に向けて、子供や孫達にこのようなつらい思いは味あわせたくないありません。世界中が戦争のない、平和な国々になるよう願わざにはいられません。

農家で食べた白いご飯

八尾市 山田富士子

当時小学生だった私でしたが、今思い出されるのは、何といっても食糧難のことが、非常に印象に残っています。

食べ盛りの子供を大勢かかえた母は、どんなにかつらかったことだったろう。今思えば家族のために、自分には食の当たらない日が何日もあったのではと想像します。しかし母は強し。どんなにひもじい生活にも私共にはそんな表情は見せませんでした。一日三度の食事は必ず頂きましたが、兄弟の姉達は母を手伝いながら、麦の入ったごはんをお茶碗に盛りつけますと、いつももうす黒い色のご飯で、白いご飯があたりませんでした。副食は大根とあげで炊いたものやおいもなどで、夏になると、さつまいものツルでした。しかしそれもつかの間で、炊くお米がなくなってきたので、一台のお米を五倍位の水を入れてふくらませ、「シャブシャブ」のおかゆを食べなくてはならぬようになり、米は配給、トウモロコシの粉も配給制で、小学生の私がその粉を持つて加工屋さんの前に並びます。皆が並ぶので長い行列があちこちの道路に目につきました。自分の番が来たら焼き上がったパンと粉と交換して焼き餃を払つて帰ります。トウモロコシのパンは独特の味がします。「いらない」と言えば一食抜くことになりますので、自分の分け前はもらつていました。こんな物ではすぐあきて、お米がほしいと何べんも思いました。何かの用事で親類の農家へ行つたことがあります。その時初めてまつ白いご飯を見ました。何べんもおかわりをして食べさせてもらいました。農家の人が一番えらい人に見えました。あの時のおいしいご飯にありつけた幸せは一生忘れられません。

不足不足と続いた毎日の食事を、今から思えば病氣にもならず、よく頑張れたものだと不思議で仕方ありません。私だけでなく、皆が辛抱していたのであきらめられたと思います。後で聞きましたが、病氣の人より栄養失調の

産めよ殖やせよ



一九四一（昭和16）年の合言葉は「産めよ殖やせよ國のため」。時の政府は「人口政策確立要綱」を定め、大東西共米国の中で日本人がアジアの指導的な立場に立つには優秀な日本人“をたくさん産むことが肝要”とされた。そのため、男子は二十五歳、女子は二十歳で結婚、平均五人の子どもを産むことを奨励した。その頃、東京都が発行した「妊娠婦手帳」には「リップナ子ヲ産ミ、才國ニツクス」と書かれていた。

自家菜園



日本軍の真珠湾攻撃が行われた翌年（一九四二年）には、早くも空地や庭を掘り起こして自家菜園づくりが始まっていた。やがてゴルフ場や野球場は大きな芋畠に変わり、お寺の境内にもナスやトマトが実り、国会の前庭も、電車道の歩道も掘り起こされた。大阪では御堂筋まで畠になつた。

人が大勢死んでいかれました。

戦争が始まると若い男性は戦地に行き、物資はみな戦場へと送られ、残つた老人、女、子供たちは各々力を合わせて国を守りました。戦争が長引くにつれ、次々と多くの戦死者が出たことを知らされ、悲しい思いをして目の前がまつ暗になつた毎日でした。

今現在は、平和な時代が訪れ、働く人たちの新製品の開発と研究によって、多くの商品が出来わるようになり、私たちの生活を満たしてくれています。

豊かになつた生活の有難味を痛切に感じる今日この頃です。

太平洋戦争と終戦後の思い出

大阪狭山市 中路 寿子

戦争のお話ということで、私なりに昔を思い出してお話をします。

日本の国は昔から戦争には強い国で、日清、日露戦争には大勝利を得ておつたんですが、昭和十六年十二月八日、日本海軍によつて真珠湾攻撃に始まり、太平洋戦争という長い争いの幕明けでした。それ以来、早くも五十余年、半世紀が過ぎようとしております。

その当時の日本軍は大勝利でした。私達も教室で先生にお話を聞き、バンザイと叫んだものでした。当時はテレビもなく、ラジオのニュースが頼りでした。しかし戦争があまり長く続いたために食糧、武器、戦争に必要なものが不足し、国内でとれた米、食品は皆戦地へ戦地へと送り込まれ、国内で生活するものは日々苦しくなつてきましたが、国民は「ほしがりません勝つまでは」を合言葉にして頑張りました。父や兄が皆、召集令状という赤紙一枚で戦場に行きました。大学で学ぶ立派な学生さんが学徒出陣と言いまして大学から全員が戦争に行きました。

私たちを驚かせたのは昭和二十年三月十三日、大阪空襲と堺市の空襲でした。その夜は私たちの住所の周辺は静かな夜でしたが、ドーン、ドーンと音

がして、外に出てみると大阪の空の赤いこと。夜通し燃え続け、ビルも家も爆弾でこわれ、焼け野原の大坂の町、堺の町は言葉では言い尽くせない悲惨なものでした。しかし大阪市民、堺市民の方々は皆一生懸命自分の力で立ち直り、現在の立派な大阪、堺になりました。

当時、アメリカ軍は沖縄本島に上陸して参りました。沖縄は島国で敵が上陸すれば逃げることが出来ず、女性、子供たちも皆日本兵に力をかけて戦いました。中でも心に残るのはひめゆり学徒といいまして、二十歳までの学生さん二百名余りが軍隊に参加して看護につき、全員が死亡いたしました。現在の沖縄にひめゆり記念館がございます。

そして私たち国内では都会の子どもたちは空襲が恐ろしく、田舎の安全な学校へ集団疎開をしました。幼い子どもたちが親の元を離れ、片田舎のさびしい田舎の学校へ移りました。今思えば可哀想な事でした。でも当時の子供はよく頑張りました。そしてどの家でも夜になれば電灯の明りが外に漏れないように電球に黒いカバーをかけ、電灯の下一メートル位が明るいだけの不自由な暮らしでした。それはいつ敵の飛行機が飛んで爆弾を投下されるかわかりませんので、住民のおらない町にするためでした。そして住民は爆弾が投下され火災がおきた時の用意にバケツリレーの練習をしたり、竹やりを使つて敵の上陸に備えました。そんな折り、アメリカは広島、長崎に原子爆弾を投下し、一瞬の間に多くの人、建物が吹っ飛んで日本人を驚かせました。戦争が長期化したこととあまりにも多くの犠牲者の出たことで、天皇陛下は日本に勝利を得ることはありませんとお考えになり、昭和二十年八月十五日、太平洋戦争は終結を迎きました。その夜から家の電灯カバーも外れ、街灯にも明りがついて、私の一番感じたことはこんなに世の中が明るいものかと痛感したことが今も思い出されます。

そして次々に外地におつた日本兵達の復員が始まりました。敗戦という苦しい中で待っていたのは、食糧難という時代でした。すべての物が配給制度になり、米、魚、肉、衣類、手持ちのお金までも封鎖制度と言いまして、手持ち金を全部、銀行または郵便局へ一応入金し、家族の人員に依つて一ヶ月幾らとお金を引き出して生活しました。その札には証紙と言つものが張つてあり、国の定めた今までいうシールのようなものでした。この証紙のないお

代用品



学徒出陣



母上様、私もよいよお国のために……

一九四三（昭和18）年、それでも兵役を免除されていた大学・高等学校・専門学校の学生たちも戦場へ向かうことになった。あるいは特攻隊員になり、あるいは前線に行く途中の船を沈められ、その多くが一度と母の顔を見ることはなかつた。いついた何人だったのか？敗戦直後に陸海軍や主要官庁が重要書類をほとんど焼却したので、その数すら正確ではないと

金は使用できませんでした。私もよく覚えておりませんが、この制度は長くは続きませんでした。衣類は全部、衣料切符という点数式の制度で、品物には値段票と点数が明記してあり、点数がなくなれば何にも買うことが出来ません。

私が最後にお願い致したいことは、戦争はつらく悲しいものです、いつまでも平和な日本であつてほしいと心からお願い致します。

“軍国少女”の日々

貝塚市 披村 益子

私等の子供の頃は、昭和十二年頃には大きな戦争が始まるとうわさされていました。

その年の七月七日、支那事変が始まりました。抗日^{こうじ}排日^{ぱいにち}の声が高まりました。その頃はまだよかったです。十六年十一月八日には大東亜戦争になりました。物資はだんだんと不足し、出口の見えない戦争となりました。

昭和十九年の三月頃より、空襲は日々に激しくなって参りました。毎日のよう、不気味な音です。空襲警報の音も、いやな地の底をはうよう、いやな余韻を感じます。ある日は着のみ着のままで床の中に入り、または靴をはいたままで、いつも出ていけるよう用意しておりました。三月十四日以後は毎日のようでした。戦争に勝つためには銃後の守りが堅ければ勝利すると言わっていました。それは一体何だったのでしょうか。私たちの努力が足りなかつたものと思つていました。なぎなた、バケツリレー、火打棒の稽古は何だつたのでしょうか。空からのことで、何の役にも立ちませんでした。

女学校である日、外国から帰ってきたような話でしたが、「この度の戦いは勝ち目がない」と長々と話されました。家で父に話したところ、特高にでも聞かれたら大変なことになると口止めされました。昭和二十年八月十五日の終戦のことはよく知っていますが、十六年十一月八日は何の日と聞かれても

「太平洋戦争開戦日」と即答のできる人は少なくなつて参りました。戦争は遠くなつて参りました。
日々、苦しくなり、日用品をはじめ、すべての物が切符制になり、米も一日に一合三勺でした。それも運配したり、砂糖にかわり、大変苦しい毎日でした。でも「勝つまでは」の合言葉で頑張つてきました。家の前の門柱に英靈の家、出征と書いてあるところでは、道行く人は頭を下げて行かれました。出征兵士の家の畠も手伝いに行きました。私たちは初めて稻刈りをしました。都會では知らなかつたことでした。大変な仕事でした。終戦を迎えた時、軍国少女の努力は水泡に帰しました。悲しいことです。
平和の五十年が経ちました、現在の人々はいいなと思います。大正、昭和の一桁の人は青春もなく、いやな人生でした。

「みどりの日」に想う

東大阪市 伊藤啓太郎



特高警察

旧制。高等警察特別高等課。特に思想運動や政治運動の取り締まりを行なつた警察。

天皇制警察は、すべての住民を調べ、通行人に不審尋問を行い、住居、映画館、旅館の個室にいたるあらゆる場所に立ち入り、あらゆる集会を監視し、すべての出版物を検閲、発禁、差し押さえの権利を持っていた。戦時中は特に、反戦思想や情報の流布に目を光らせていた。一九四五（昭和20）年十月、治安維持法の廃止とともに廢止。

昭和十六年（一九四一年）十二月八日、陸海軍の精銳部隊がハワイ・真珠湾やマレー半島の米英軍基地へ奇襲の火ぶたを切った。太平洋戦争の勃発である。満州、中国大陸に駐屯の日本軍に撤退を迫る国連決議に強硬反発した。軍閥の國際情勢の無視と、國力過信による無謀な不意打ち戦略の発動であった。

当時のマスコミは挙げて初戦の奇襲戦果を賞讃し、戦意の高揚を煽った。だが、戦局は六ヶ月後のミッドウェー海戦で決定的なダメージを受けてしまった。即ち、連合艦隊の主力機動部隊中、新鋭の大型空母数隻が米海空軍に撃沈されて優秀な搭乗員共々太平洋の藻屑と消えてしまった。

戦術的には、もはや時代遅れの巨艦、大和、武藏を後生大事に戴く連合艦隊と、無傷で我れに数倍する機動力を温存する米海軍との戦力の差はあまりにも大きく、この時点で既に勝敗の行方は明らかであつた。



「エイツーやア——」

竹槍訓練

しかし、帝国大本営はこの重大な戦局の頗る勢をひた隠しに隠し、ひたすらに国民を欺き続けて、その後は急坂を転げ落ちるように敗退玉砕（敗退とは言わざ転進と称した）の連続で、ついに広島・長崎への原爆で無条件降伏の終止符を打たざるを得なくなつた。昭和史最大の悲劇である。

聖断の 遅かりしかな 原爆忌

私は昭和十八年（一九四三年）、徵兵検査で肺浸潤の診断を受け、第二国民兵と判定され、当時大変不名誉な肩身の狭い思いで自宅療養を余儀なくされたが、戦況の悪化はそれさえ許されず、二十年三月の召集で十六師団に入隊し、直ちに熊本県人吉に衛生兵として三八銃もない部隊に配属。八月終戦、九月に召集解除、復員兵として毛布と砂糖を貰つて帰宅した（一九四五年）。

戦後五十年。外地帰還兵や古参・同年兵たちと当時の武勇伝から戦後の民主化、世界観の認識など話していると、太平洋戦争の倫理に関して肯定的、否定的と各自の認識に差違があり、否定していくても潔く認めない団塊、外地駐屯時代の軍隊生活を恋しがつてゐるような回顧組さえもある。彼等にとっては、当時の軍国思想一色でお國のために必死に戦つた自分の青春を、今になつて歴史的にも客觀的も無益な侵略戦争に駆使されていたとは認めたくない。といつてあの戦争をおおっぴらには肯定もできない。この矛盾を割切れずに苦渋の胸中を抜け出せずにいる人々も少なくない。これは、再び還らぬ自分の青春に墨で真っ黒なバツを書かれる思いで、本人にとつては耐え難い苦渋であろう。この感情の始末をどう付ければよいのか、困った問題である。それは所詮、感傷に過ぎないと単純に割り切つては無責任な傍観者の冷ややかさと責められる。やはり厳正な歴史の審判を統一した国民の世論として確立される必要があるのでなかろうか。

今日ははからずとも昭和天皇誕生日で「みどりの日」とかいう祭日である。こんな訳のわからない名称より、いつぞ「昭和回顧の日」とでもして動乱の昭和史をふりかえつてみる方が有意義ではなかろうか。

還えらざる 青春哀しみどりの日

二〇〇〇年 四月二十九日

祖母の背中から

熊取町 永峰 晴巳

年月の流れとともに、だんだん風化していく私の戦争の記憶ですが、今も鮮明に脳裏に残っているのは祖母の背中で見た、昭和十九年の大阪大空襲の時のことです。

身体の弱かつた私は、いつも空襲に備えて庭に掘られた防空壕の中で寝かされていましたが、その夜は祖母と一緒に畳の上で寝ていました。夜中に急に起こされ、祖母に背負われ逃げ出す時（祖母も慌てていたのでしよう、さかさまに背負つてくれました）。すぐ近くで火が燃えており、ガラスの壊れる音がしていました。照明弾と焼夷弾と熱風に追われて川の方へと逃げるのですが、すごい混乱のなか親とはぐれた小さな子が、今私たちが逃げ出してきた方へと泣きながら歩いていく姿、そちらに行けば焼死するかもと思つていても誰も声をかけたり、手を引いてあげる余裕もない状態。やつとたどりついた川べりでは、熱さから逃げるために川に飛び込みそのままおぼれてしまふ人、逃げる途中で爆弾の破片が当たつたのか、亡くなっている背中の赤ちゃんに気付かずあやしていいる若いお母さんの姿など、さかさに背負われながら声もだせずにじつと見ていました。

それから五十数年、多くの幼い命や善良な市民の命の犠牲の上に今の平和があるのだとの思いが、いつも私の心の中にあります。それが最近の世の中の流れのなかで、かつてのいまわしい時代に似通つてきているのに心が痛みます。戦争の記憶が薄れるとともに私たちのまわりに反民主的な「通信傍受法」が作られ、危険な改憲論議が強まっています。私たちの大切な祖国日本は、何処に行こうとしているのでしょうか。次々と起ころる環境破壊から地球を守ることと平和を守ることが、子どもたちに未来を約束する私たちの務めではないでしょうか。

戦争を二度とおこさないためにも。

国民学校



一九四一（昭和16年）、それまでの小学校が国民学校と改められた。それは、戦場につながる教育の徹底だった。次は国民学校三年の「修身」の教科書より。

私たちは、日本やつゞぐれた國に生まれたことをよくわきまへて、心をりっぱにみがかなければなりません。さうして、からだをじやうぶにし、強いたくましい日本国民になつて、お國のためにはたらくことができるやうに、しっかりんきやうすることがたいせつです。

もともとは葛飾北斎の書物で使われたことばで、玉のように美しい砕け散ること。転じて、名譽や忠節を守つて潔く死ぬこと。
旧日本軍では「生きテ虜囚ノハズカシメヲ受ケズ」とされ、戦闘に負けると判断すると敵に突撃して倒されるか自殺を選ばしかなかつた。島の基地守備隊などでは、将兵だけでなく、強制的に連行されていた朝鮮人などの外国人や一般人も多くが巻き添えにされた。



玉砕